



し、ひとつの話だということがわかります。取税人、罪人と一緒に話している人に対して、「この人は罪人たちを受け入れて食事まで一緒にする」と言っていたパリサイ人と同じ、その中でも特に金好きな者ということになると思います。金好きなパリサイ人と書いてありますが、金好きじゃないパリサイ人は多分いません。パリサイ人はみんな金好きなんですね。だから、ここで批判されているわけです。その前提に立ってこの話を聞くわけです。

この不正な管理の話は、少なくとも不正な管理人が出てくるのが、この8節までなので、ここでひとつですと(16:1-8)。9節からあれ、どこまで話が連携しているのだろうかということなのですが、最後に、「あなた方は、神にも仕え、また富にも仕えることはできません」ということがこの話していることの結論ですから、「神に仕える。富に仕える。二人の主人には仕えられない。」という話が、ここで説明されてるんだらうと予想できるわけです。仕えるというのは、しもべのことです。「神のしもべなのか、富のしもべなのか」と。管理人とは、主人のしもべです。ですから、「神に仕えるのか、富に仕えるのか」「いや神に仕えます」と。「神の国とその義を第一に求めます。そうすれば全てが与えられます。」という山上の説教のところに書いてある通りに、この神に仕える、富に仕えるのが、この9節から13節で話していることの要約みたいな形ですから、この言い方を見て、この箇所(16:9-13)を解釈しなきゃいけない。そして、この箇所を見て、この財産を乱費してる不正な管理人の話を見聞きしなきゃいけないということ。文脈といった時に、なんとなく話の流れというような形を思ってしまうと思いますけれど、文章の形の中の位置付けです。文章全体の構成上どういう位置づけになっているのかというのが文脈ということなんです。

難しい箇所ってだいたい翻訳も難しくなってしまう。もとの内容の解釈に一致がないので、「あれ？これはどうなんだ？」ということになってしまうものだと思います。この箇所を見る時に、これは新改訳の第二版ですけど、新契約聖書という古いのですが、昭和3年、永井先生が訳した新契約聖書。これまだ売っています。ギリシャ語の元の翻訳原本の何種類かあるうち新改訳とは違うものを訳していると聞いています。原文に非常に忠実な訳なので、あれ、これはどうなのかなと思った時に見たりしています。英語だとかギリシャ語の直訳を確認したり、インターネットですること出来ますけれども、この新契約聖書というのは、役に立ったりします。

注解書を見たりしますね。そういう時に、この不正の富の「富」(9)ですね。不正の富の富が無くなった時、それと神にも富にも仕えるという、この「富」(13)ですね。不正の富(11)。この富という言葉はマモンと言っています。神にもマモンにも仕えない。このマモンというのはお金の偶像みたいなものですね。ですので、まずこの不正の富でという言い方が難しくなるひとつの理由。元は、これはヘブライ語やアラム語で話していますので、ギリシャ語の文法がどうかということではなくて、その裏にあるヘブライ的な表現を考えなければいけないものだと思います。

ただ、この中で文章をよく分析してみれば、この「不正の富で自分の友を作りなさい」というのが、この管理人が負債を免除してるという話のようですよ(16:4)。不正の富で、こうしておけば富が無くなった時に家に迎えてくれるということです。こうしておけば富が、マモンが無くなった時に、永遠の住まいに迎え入れてくれるという文章が同じような感じなんです。ということは、不正のマモンではなくマモンに不正と考えるのではないかと思います。マモンに不忠実。不忠実なのですね。マモンに忠実じゃない。つまり、この世の富に忠実じゃない。この世の富を捨てるということです。この管理人は、マモンを助けにできなかった。マモンを捨てて恵みにより頼んだということですので、マモンに対して不忠実。マモンを嫌うという意味でマモンに忠実じゃないというこ

とによって、住まいにずっと居させてくれるというこの世の富に不忠実ということです。

この世の富に不忠実ということは、小さいことに忠実という、ひっくり返っているような感じです。マモンに不忠実ということです。マモンに信頼していないということは、この世の富を忠実に扱っているということなんでしょう。この世のことに忠実なら、大きいことにも、その上のことにも忠実だという話をして、だから、あなた方が不正の富、マモンに不誠実であるということに忠実。否定形の組み合わせが何段階もある感じです。

そうじゃなければ、まことの富、富って言葉がないのですね。まことのものを任せるでしょうか。不正の富で忠実、まことの富？と言って、これが分からなければということで、また説明があります。この世のものに忠実じゃなかったら本物もあなた方に与えません。他人のもの、与えられたものに、神様のものに忠実に扱うのじゃなければ、あなたがたに与えることはありませんということが、12節で言われ、二人の主人に仕えることはできないですと。神に忠実なのか、富に忠実なのかということ問われている。

この不正な管理人の2018年の資料の中に、他にもいろいろ思い出さなければいけないところ、確認しなければいけないところがありますよ。それで12章の中にも忠実な管理人の話があったり、ずっとお金なのか、永遠の命なのかということをお話していますので、そういう箇所と比べて一緒に見るならば、全てのものを捨てて従ってくるのであれば私の弟子にはなれませんというのは具体的には、ニコデモのところ、不正な管理人だった人がアブラハムの子にされてるという箇所があります。そういう箇所と一緒に見て、ザアカイの話が19章にありますけれど、19章のところで「あの人は罪人のところに行って客となった」と言って周りの人が文句を言っている。「(15:2)まさにこの罪人達を受け入れて食事まで一緒にする」と言ってる言葉と同じですから、このザアカイの話と一緒に見なければいけないってことも文脈上、言われてるものだと思います。このマモン、この世の富に忠実じゃない、仕えていないということによって「自分の友を作りなさい」と言われてるといように、この不正の富という言い方を解釈すると、全体の流れが見えてくるのではないかと思います。